

ミオヤの光

光壽の卷

歸趣……………	一
根底……………	三
統一擔保の主體……………	一〇
歸趣……………	一四
天然教の歸趣……………	一六
超然教の歸趣……………	一七
圓具教の歸趣……………	一九
阿彌に歸趣の兩方面……………	二四
體質……………	二五
無量光……………	二六
光明と壽命……………	三三

歸趣

セルリンク曰く、自然は未だ發展せざる状態にある所の無意識的精神なりと。

世界は相対的に對立すると同時に絶對の存在することは已に理論のゆるす所ならん此世界の相待因果生滅は自己を所依とするにあらすして其超然たる高等なる理性の根底を所依と爲すべし。而して根底なる實體は絶對ならざる可からず。此世界及び衆生等は依佗起性即ち衆縁の相關に規定せられて自己實體にあらす。此因縁の相關の依佗規定なるものは其規定の極には無規定に到らざるを得ず。此無規定の極に到らば即ち絶對なり。此相待規定を盡して後無規定絶對の實體が始めて顯はるゝに非ず。此相待規定を總合し統一する處の理性が即絶對なり。法界觀門と及び註に現象世界と實體との區別を明すに三義あり(意を取るのみにして本文に非ず)(分量と象相と性質との區別に三義あり。)

一

二

一、無限の義。謂く實體は無限なり。實體若し有限ならば現象界は實體の外にあらん。喩へば空無限なり、空を離れて何の處にか色法あらん。現象世界は相互に分限して無限に非ず。分限の世界萬物は無限の實體と區別せざるべからず。

二、無壞の義。世界因果規定の萬物は成壞生滅ならざるなし。實體には生滅成壞なし。生滅の世界萬物は無成壞の實體と別たざるべからず。

三、無雜の義。世界相待規定の萬類は物心等は衆質雜混す、實體は至純至粹の性質なり、故に世界と實體との二質は別たざるべからず。

是の如く相待世界因果規定と實體の絶對とは區別す。世界衆生は有限に生滅し衆質雜混し實體は絶對無現の本質にして、永恒自存して滅壞なく純粹の本質のみ。斯く世界と實體を別ちて而して後實體は根底と統攝と歸趣の理性なるやを研究せんとす。實體は世界的の本體にして世界の根底にしてまた一切の世界萬物を統一擔保し而してまた一切勢力の最終の歸趣たり。

根底(客體)

今日の一元論は萬物皆活けるを認む。生物學心理學も同じく皆物質の皆活けるを認む動物植物其根本無差別なり。

宇宙(世界及び衆生)は相待因果に規定せらる。所謂る因縁所成法にして衆質相係より成立する者なり。

中論に因縁所成の法は即ち假なりと。種々の衆質互に素因となりまた助成規定となりて成立す。世界の十界、三千の性相、七大物心の二質と成る。

此相待規定なるものは偶然に相寄て成立せるものに非ずして若は依報正報若は色心一切の身心土の規定は偶然に非ず。規持の統一秩序を有せるなり。個々は各自より生れたるに非ずして高等なる理性の根底によりて成立するものとす。密師の原人論に萬靈蠢々皆其本あり、萬物芸々たる各其根に歸す。況んや三才の中の靈たる本源なか

三

らんや、自ら自己の從來せる所歸趣する處を知らざるべからずと、

四

古來世界及び衆生の本源を研究するに、之を究むるの意識の深淺に従て根底を見ることまた深淺あり階級あり。今萬物の根底を研むるに淺劣なる天然教より高等に發達したる圓具教の究むる所に至るまでを三つに分ちて説明せん。

一、天然教 二、超然教 三、圓具教。

初、天然教とは幼稚なる宗教意識、即ち原始的宗教なり。純朴なる天然の人には其大本なる神の觀念は天然現象の中にありと認む、亦天然の物素と一なりとし深奥の理を省慮せず、故に彼等は世界觀に於ても天然現象を超えることなく人生觀も又同じく天然なり。原人論に、所謂儒教を習ふ者は人の本源を説くに、「祇知る近は則ち乃祖乃父が體を傳て相續して此身を受得たりと。遠くは即ち混沌の一氣割れて陰陽の二と爲る。二、天地人の三を生ず。三、萬物を生ず。萬物と人と共に皆氣を本とす。虛無大道が一切を生成養育すと。謂く道法自然が元氣を生じ、元氣天地を生じ、天地萬物を生ず。故に智愚貴賤貧富苦樂皆天に稟け時命に由ると。」密師曰く彼等身の元山を究めず、所說萬物象外を論せず大道を本と爲と雖も順逆起滅染淨の因縁を明さず、

我國の神道の造化の三神の説の如きは天然教たることは論を俟たず。天然多神教も亦及天然一體教に於ても皆天然的に本に立て、萬物の發生を認む。スピノーザの汎神論も及び今日の自然科学の唯物論者の如く、盲目的機械的世界觀は自然現象に根底としました實體とす、未だ超自然の精神態實體を認むる能はざるは、悉く是等を自然教とす。

古代の宗教的意識の幼稚なる時代には、客觀の觀念、天然的を超越する能はざるは止むを得ず。文化發達したる時代と雖も人の意識は種々階級ありて、唯機械的物質的に發達したるも精神に於て超自然の觀念内容にして進化發達せざるものは機械的世界觀に墮せざることを免れず。經に心生ずる時は種々の法生ずと。心に依て世界觀を異にす。青眼鏡をもて萬物を青色に見る如く、世界觀は各自の意識によりて種々の異様に

五

見るなり。

超然教根底

六

超然教は天然物素を超越して精神的に根本及び動力を認むるが故に超然主義とす、人天と小乗は本質を認めずして業即ち動力のみを根本とす。法相は唯識にして精神態なり。

原人論に華嚴經によりて五教に分ち、

初に人天教は、三世業報善惡因果三善三惡苦樂の報命を感ずるは各其本源は業即ち羯磨に因る。然るに業に三種あり、善と惡と不動との業作が三界苦樂の報を受ける元因たり。若し業なき時は報の感すべきなし、故に人の根本は業動力とす。個人業動力とす。個人業力を根本とす。

小乗教には、人は身心共に無始劫より己來、因縁力の故に生滅し相續窮りなし。身體と精神とは假に合して一に似たり、常に似たり、凡愚は覺せず、執して我と爲す、我によつて貪瞋痴の三毒を起し、身口に行動して一切の業を造る。業遁れ難し、故に五道苦樂の身と及び三界勝劣等の處所受の身を執して我と爲し、還た業を起し報を受け、身は則ち生老病死、死して亦生ず、界には則ち成住壞空、空にして還た成す。小乘また惑業をもて生死及び世界の根本とす、個人及び共同の業力を以て世界を感ずるの力用を本として未だ心相を立てず。

法相は、唯心論、迷悟心體を異にす、藏識は自然界の根底、一轉して三身四智と成る。

大乘法相家は説く、一切衆生無始より己來、法爾として八識あり。第八賴耶識是其根元。頓に根身器界種子を變じて轉じて七識を生ず。皆自分の所縁を變現して都て實法なし。如何變するや。我法分別薰習力の故に諸識生ずる時變じて我法に似たり。第六七識無明覆ふが故に此を緣して實法を執す。喩へば重病を患て異色なる人物を見るが如し。患力の故に實に人ありと謂ふが如く、我身も唯識所變なり、賴耶識を以て身

七

の本と爲す。

破相教は説く、一切因縁より生ぜざる者なく、是故に一切の法を空ならざるなし、因縁所生の法は我説く即是れ空と。信論に一切諸法唯妄念によつて而も差別あり。若し心念を離れば即ち一切境界の相なし。是教には空をもて身の本と爲す。此等を超然教と名づく。

一乘顯性教。一切有情皆本覺真心ありて無始より己來常住清淨にして昭々として味ます、了々として常に知る、亦佛性と名づく、亦如來藏と名く、無始より妄想之に翳して本質を自から覺知せず、但凡質の方面のみを認むるが故に耽着して業を結び生死の苦を受く。又靈覺真心清淨にして全く諸佛と同じきを開覺す。華嚴經に曰く、佛子一衆生として具に如來智慧有らざるなし。但妄想執着をもて自ら證得せず。若し妄想を離れては一切自然智無礙智即ち現前するを得と。

(精神教の一體兩方面迷悟差別あり、體一なり。衆生誤て迷方面を見る、本覺真心を根底と爲す)

圓具教

相待的規定なる世界及び衆生は自己より出るものに非ずして必ず高等なる根底なる絶對にして無規定の理性によつて成立するものとす。

絶對にして無規定なる實體、即ち世界及び衆生の根底をあみの法身如來藏性と名づく一切世界と衆生とは此法身理性の規律の統一的秩序より出でたる世界及び衆生なりとす、故に楞伽に十方國土及び衆生等はあみた國より出づとは是なり。此教の一切最終の根底は即ち阿彌の法身とす。即ち永恒自在精神態なりと爲、華嚴の本覺真心とは同體異名なり。絶對精神態の體質は後に論せん。

宗教意識の原始なる天然教より最圓滿に進化したる圓具教に至るまで漸次に發達せしなり。原始の意識には世界其ものに實體根底を發見すること能はず。次に進で超然教には實體と世界とは其性質隔別にして世界の本質を斷盡絶滅するに非ざれば實體顯

示することなしとす。

次に圓具教には、世界には別に本質あるに非ず、世界の實體即ち本覺真心態即ち世界の實體なり。世界を絶滅して後に實體顯るゝに非ず、現象と實體とは一體の兩方面のみと、故に世界の根底は則あみの法身なり。

圓教の根底は本覺真心即ち阿彌法身なり。

世界直ちに絶對の本質と云ふべからず、先に示せり。

統一擔保の主體

世界の根底を宗教意識の三級によつて三等に分ちたると同じく、世界及び衆生即ち宗教主體の一切の個々を統一し、擔保するところの絶對主體を究めんとするに。根底と同じく初め

天然教には世界物素天然的己上には之を統一し擔保する主體あることを認むるなし此世界衆生を統攝し保存する勢能は天然物素にある勢力にして天然物的己上のいかなる本質理性あるべきを意識せず。

絶對と世界とを對峙する觀念には、絶對理性と世界及び衆生、相待的の規定は是自然にして然るに非ず、法身の規持する統一秩序を有し高等なる實體によつて統一し擔保せらるゝものにして、相待規定なるものは、依佗起性の因縁のみにして規持すべきものに非ず。

精神的宗教には天然的の依佗規定の生滅現象の己上に之を統一せる絶對の本質を求め、之によりて相待規定の生滅因果の世界より解脱すべき理性なりとす。之を統一し擔保するの本體にして世界と同等の性質ならんには之と併立し之が爲に評争し之に局限せらるゝが故に絶對と云べからず。また絶對とは一切を綜合せる天然界なりとせば儒教にて大極乾坤陰陽の元氣がとほく世界を統一し擔保するは天地自然の力によるものとす如き自然教に墮す。又道法自然に保存せらるゝと云ひまた天然一體教及び自

然科學にても太陽のエネルギーによつて保在し活動すとの觀念は天然的幼稚なる意識にして即ち天然機械的盲目的規律によつて保存せられた統一せらるゝものとし、彼等は天然界は超自然の高等なる實體の爲に統一し擔保せらるゝことを意識せず。故に天然教と名づく。

佛教の天教には一切衆生は悉く各自の業力によつて保存せらるゝものとし、各個人の統一秩序の本あるを明さず。小乗教は個人の惑業力によつて各個人は自己の業力に保存せらるゝ、世界一切の衆生の共同業力によつて世界を保存すと。故に衆生の惑業が盡る時は世界も保存すべきに非ず、此教は業力を説て未だ本體を明さず、是方便のみ。大乘法相教には世界及衆生は悉く阿頼耶識によつて統一し保存せらるゝ。唯識所變の世界なれば、識の轉依せざるよりは世界及び衆生は保存せらるゝものとす。破相教には世界所成の法の存するは因縁によつて成する所、唯妄念によつて差別の世界は保存す。若し念を離れては世界及び衆生あることなしと。華嚴經には唯一眞性不生不滅變更なし、眞性には無限と無壊と無雜との二義あり。華嚴は超然に非ず。圓具に屬す。絶對無限の眞性と現象世界とは圓融無碍にして本質と現象とは離れたるものに非ず。世界及び衆生を統一し擔保する本體は即ち絶對眞心なり。此眞性の妙用によつて保存せらるゝ故に世界斷盡して後に本體顯現するに非ず。若し斯の如きの見解は天然教に墮すればなり。

圓具教には華嚴と同じく世界衆生は相待因果を超たる高等の絶對眞神態に無規定の實體ありて之を統一し擔保す。本質と現象とは圓融無碍にして本體は世界一切を統一し擔保するのみに非ず、本質内容は豊饒にして無邊の聖徳を具存し、世界萬類はこの本體の勢力に發展せられて發生すると共に之に統攝せられ、内容は豊饒なれば種々の方面に發展し之に勢力を與へて活動せしめ、又無邊の性徳具存して種々の方面に發現し活動するのみに非ず。内面に常寂光土また蓮華藏世界ありて清淨法身及び塵沙の相好妙色身を示現す、而して又衆生を自己の内容に歸趣せしむるあり、是を終局目的的

理性とす。

(絶對同本質に、精神に隨て種々の異相を感見す、是本質別なるに非ず、精神の性質によるものとす。一水四見の喩。)

歸 趣

世界一切の實體根底として一切を發生し之を統一保存する理性としては天則規律の秩序の理性としてまた一切の宗教主體を總括する根底の絶對主體たりとす。また一切個々の主體即ち衆生心には之を高等に開展して終局目的に眞理に歸趣せしむべき理性あり。衆生には歸趣の理性あるも之を開展し解脱せしむべき勢力を與ふるに非ざれば自ら開展し歸趣すべきこと能はず。之の歸趣の理性を明さんには先づ世界過程の中には唯物的規定の流行のみに非ずして動力的理想的の存在することは多くの理想家の認むる處ならん。天則の秩序の理性と歸趣の理性とは本質同きも衆生に對する功能は同じからず。天則秩序には統一的理性、衆生佛性の一大本體としては終局には佛性を開展する理性として即一切慧感なり。

一切の理想的勢力は不識意識に拘はらず理想的歸趣の理性あるあつて自然に活動す人生を疑て歸趣も目的も認めざる懷疑論者は但哲學として成立せざるのみならず歸趣のなき空言に過ぎず。無情なる草木さへ日光を尋ねて其方面に蔓延するに非ずや。人の理想あるもの、盲目的生活に自ら安すること能はずして歸趣の目的の光明を求むるは是れ全く歸趣の理性ある所以に非ずや。

天然の人は個人目的の外に絶對の歸趣の理性なく、終局目的あるを識らず、不識の中に自己の目的を立て盲目的個人目的の第一義とするものは實に哀むべきものとす人は自己本來絶對の個人なるを開覺して其絶對の目的に協力するに至て始めて眞理に契ふものとす。已に歸趣の理性を發見したる後はこの協力的に力行せざる可らず。絶對終局目的の光としては一切慧にて衆生精神開展してこの眞理の目的に歸趣せしむる

理性にして、之れ絶對より個人に光を與ふる智慧態たり、之を報身と名づく。報身といふも時間的因果的にあらず。目的論的に絶對目的が個人に對して攝取の光を與ふ。空間的に個人の信仰に對する報なり。信仰なければ報ひず。衆生は其客體に歸入して自己を亡したる時客體の報身と致一す。

天然教歸趣

天然教、解脱とは經驗世界の惡毒を脱し客體に對する願望は有形感覺の超えず。神も有形界に求め解脱と云ふも有形の苦を脱せんとの觀念に過ぎず。有形的利己主義幸福主義なり。故に其法規も徳教も他律的たり。又歸趣の目的としても天然を出でず儒道二教共に天然教にして歸趣する處淺薄なり。孔子曰く死生有命富貴在天と。原人に儒宗萬物既に天地の元氣を稟て生ず、草木の根に依て榮茂を得死する時は其本始に復る草木凋落して精脈其根に還るが如く、其稟る處の性命に復る、天地より生じて天地に復る。椰子曰く、上天我を生じ上天我を死せしむ。儒宗執らく、氣聚るを生と爲す、氣散するを死と爲す。道家虛無自然を歸趣とし、印度の冥諦外道無因緣論等も天然を歸趣とす。天然多神教及一體教も亦歸趣する處天然的に幸福主義なり。たとへ靈魂轉じて天國に生ずと云も其天國なるもの天然的幸福主義にして方處を換て快樂を願望する如きは其歸趣する處幼稚にして天然教の範圍たり。唯物者自然科學の歸趣する處自然界を出ざるは論を俟たず。

其他東西を問はず天然教に屬するものは悉く之に攝することを得べし。

超然教の歸趣

波羅門教は宇宙現象界は幻夢の如く眞實に非ず。客體の波羅門天は眞實清淨にして無限なり、此に歸趣する時は解脱を得と。佛教小乘教は五陰主我及び煩惱を斷し無我の觀智を以て貪瞋を斷し諸の業を止息し我空眞如を證得し乃至羅漢果を得て灰身滅智

方に諸苦を斷ず、之を終局とす。法相家は衆生法爾として五種格別の種性あり、有漸無性は永く成佛せず、聲聞定性は真空涅槃を歸趣とす、緣覺も亦同じ。菩薩種性は漸次に眞如を分證し終局賴耶を轉依して四智三身圓に證するを歸趣とす。

是等を超然教と名づく所以は梵天教には現世界を幻夢とし此を超越して彼岸の天國は絶對無限、此世界の有限と彼の無限とは其性質を異にすと。亦猶太教及耶蘇教には神は能造主、世界は被造物、能所質性を殊別にす、被造物は超然たる彼岸の天國に入らざれば神と合する能はず、神は絶對に非ずして高遠なる最高等の靈界に嚴臨す、法律と信仰とによつて救靈せらる、彼天國に生ずるを歸趣とす。また佛教の中にも理論的形而上論を意識せざる淨土教の宗教意識も是等と同じく客體は高遠なる彼岸に在りて彼に至るに非ざれば知見した客體と合一すること能はずと謂へり。斯の如きの意識は宗教々理の然るにあらずして象相の上に立ちて本體を明さざるが故に是淨教形而上論を識らざる故なり。淨教本圓滿なる大乘佛教なり、焉ぞ圓具の理なからん。

梵天と耶蘇教と本體を明さざる淨土教との宗教的意識は終局目的と主體との分別を空間的即方處に立て此處より彼に轉じて始めて眞實に客體と致一すと謂へり。佛教の小乘及び大乘法相及び空宗等は終局目的を時間的に或は百劫に滿位を得、或は三祇の劫を経て歸趣を得と。甲は空間的に超然の理を執し乙は時間的に超然の義を計す。小乘權大乘及び三論等は空間的客體によらず、自己の修行より因果律的に果分の佛果を顯示す。

圓具教の歸趣

華嚴經に佛子一衆生として具さに如來智慧具せざるなし、但妄想執着をもて自ら證得せず、若し妄想を離れば一切智無碍智即ち現前すと。又初發心時便成正覺、所有慧身不由佗覺、清淨妙法身湛然として一切に應すと。又云ふ、如來涅槃界其量等虚空、一切衆生入而實無所入。

此乃ち一切衆生本來如來境界の中に在らざるなし、更に所入なきなり。人の迷ふが故に東を西と謂へり。悟る時は西のみ、衆生迷ふが故に妄を捨て真に入るべきを悟る即ち一切真なれば別に真の入べきなし。

華嚴の圓具は主體と客體とが時間的に因果的に因より果に歸入す。

淨土教は空間に自己を捨て絶對なる客體に歸入す。絶對の彌陀より出たる主體は絶對の客體に歸入す。歸趣の本體も根底の絶對も同一なれども衆生よりの概念同じからず、また性能も一ならず、根底としては天則、發生。歸趣として佛性開展して自己に歸入せしむ。

衆生本來真心了々不昧之を如來藏と名く。無明翳が故に自ら證得せずして生死に沈む。衆生具に如來智慧を具し之を開覺すれば本來是佛。故に須らく行は佛行、心は佛心に契ふべし。本に返り源に還り凡習を斷除して之を損して無爲に至り、自然に應用無窮なるを佛と名つく。

(已上華嚴、原人論の意を執る)

禪家曰く、一切法若は有若しは空、皆唯眞性。眞性無相無爲體一切に非ず謂く凡に非ず聖に非ず善に非ず惡に非ず、然も體の用としては能く種々を造るが故に凡と聖とを現す、心性を指すに二類、

一に曰く一切言語動作も慈悲貪瞋苦毒も快樂も汝が佛性是即體なり之を除きて別に佛なし、此天真自然の故に心を絶し道を修すべからず、道是心、無斷無修に任運自在を解脱と名づく。本性本より不増不減、何ぞ添補を假らん。但時に隨て妄業を息め神を養ひ聖胎増長して自然に神妙を顯發す。此則ち眞修眞證なりと。二に言く諸法は總て夢妄なり。本寂にして塵境本より有ならず、空寂の心靈知不昧、是汝が眞性迷に任せ悟に任せ心本自知る。知の一字衆妙の門、萬行唯無念を宗と爲す。無念なれば愛惡淡泊にして慧智自然に増長す、自然に作佛す。

圓具教の歸趣の義は古來あらゆる宗教の最高等に進化したる宗教的意識に適したる

觀念にして彌陀は即絶對無限の本質にして其性能よりは一切を開展する理性又能として無盡の身心土を發現し、歸趣の理性としては一々の刹土に法報應及び變化身を示現して衆生を攝取同化の妙用を施す。本質の内容には無盡の性徳ありて本質の眞神態を動さずして夫に發展せられたる世界的方面には地獄餓鬼畜生修羅人天の六凡の衆生界を顯す。此の六凡の根底は實體なり。絶對眞神態の外に別に實體あるに非ざるも、衆生は無明垢質の爲に自ら迷惑して六凡の垢質を實法と謂ふ、是迷なり。此衆生世界の方面より終局目的に眞理の方面に歸趣すべき理性あり。あみは一切智慧と能力とを以て一切を開展して無限の光壽の内面に歸趣せしむ。淨教に時間なきに非ざるも目的は時間に關せず、たとへ三祇の時間を期するも目的に歸趣せざれば何の要ぞ。須く、唯目的を得るにあり、相待自己を絶對あみに歸趣するが目的なり。目的論は目的に向ふ時に之に對する空間的報身現はる。報身現する時自己を亡す。

主體客體を立つる絶對目的即ち攝取の理性あり。客體を立る宗教にして時間的報身にあらざれば報身に非ずと執するは理にくらき甚しからずや、何の爲に報應の客體に歸入する。何ぞ因果時間教の客體の報佛を立てざるをせめざるや深く思ふべし。宗教は直顯心性の心宗と直顯心の性教と同じく禪には心性を自性天真佛を客體とし性教には一眞法界を客體とし圓具にはあみを客體とす。宗教としては最圓滿完全なりとす。

十方三世法報應及び變化此身も亦無盡の衆生界身心土も悉く阿彌を體とし阿彌隨縁の衆生は阿彌の中に在て自ら迷没し、阿彌は十方法界の身心土の實體として常然無碍、不可思議の圓融無碍の體内に在て重々無盡具徳の故に十方衆生は各異方面を見る。隨縁の地獄阿鼻焦熱と現するも本體は不變にして本自清淨なり。隨染には六凡の迷相を現し淨縁には四聖の悟相を呈し、六凡四聖は同の異方面に外ならず。阿彌無碍の中に諸佛賢聖は無盡の清淨國を現して安住しまた一切衆生を度す。迷的衆生となりては常に諸佛の爲に心性を開示せられ悟的諸佛となりては教へてあみの内容に悟入せしむ。

阿彌に歸趣の兩方面

阿彌の本質に歸趣する時は形式に常寂光土(即ち理性の智慧態を土と名く)と又塵沙の相好妙色身を示現し、七寶莊嚴の依果は則ち本質形式中の感覺的現象なり、已に歸入する時は真我の中の自己にして絶対真我の外に我あるなし。此常寂光即ち理智冥合絶対理性と智慧との致一態は必至滅度に入る性能なり。又常に神的活動としては普賢行願の徳用なりとす。一たび阿彌に歸入する時は内面常然阿彌と致一にして表面には個體を現して阿彌の聖意實現的に神的活動す。

世界的衆生は表面は個々各別の如くなるも最深の内面に不可割的に統一せらるゝ理性あり。夫と同じく終局に歸趣すべきの理性あり。よりに開展して本元理性と致一す理性と一體たればなり。個人にも此性能本より具備す。然れども未だ意識せざるが故に自我を執して迷没す。本真に歸趣することを得ず。人佛知見啓示によりて絶対真心を知り、心情に歸命融合し真我と致一し猶進んで阿彌の目的に協力して終局に歸趣す。三絶對主體と絶對客體とは同一理性の兩方面なり。天則秩序の理性には絶對主體、歸趣の理性には絶對客體と現はるゝ。絶對主體は歸命の個體、絶對客體は所歸の客體、同一性の二方面なり。

阿彌は絶對無限にして相待規定の原始根底にしてまた世界を統一し擔保する絶對主體にして終局目的には一切に真理の自己に歸趣の光を與ふる理性なり。斯の如きの理性なるが故に世界及び衆生の依屬し歸命すべき性能なるを識る。是よりは阿彌の本質性能を研究せん。

體 質

本質即實體は絶對にして自己即ち絶對なり、一切相待規定の存在は自から實體に非ずして絶對に依て實體とす。實體は佗に依るべきものに非ず。相待的なる者は因果相待

にして生滅變遷常なく有より無に轉せず。實體には生滅變易有ることなく、また差別の相あることなく、本無定相にして一切の定相を生ずべき無規定なり。實體本質と顯動態の世界現象とは分離すべきに非ざるも、純粹なる本質の概念を明了にせんには實體本質に消極的と積極的との兩方面あることを知るべし。先づ純粹の本質を明さんには觀念的に之を觀せざるべからず。

絶對阿彌の本質は真空即ち精神態、虛妄念慮に非ざるが故に真心と云ひ非物質の故に空と云ふ。即ち自中存在永恒精神態なり。絶對本質は本來本覺真心永恒自存精神態即ち無限光壽なり。消極の方面としては超空間超時間超物質にして其活動としては遍時間遍空間徧活動態なり。積極に表明すれば無限光壽、永恒自存精神態なり。

自存とは阿彌本體空間に内に非ず外にあらず中間にあらず自己絶對の實體に實存する一切空間を現出する活動の主體は空間態の實體にして自己の中に精神態即ち觀念的に存在せり。絶對無限壽命即ち永恒自存なり。

實體は絶對にして時間の形式を越ゆ。過去に非ず現在に非ず未來に非ず、三世當念絶對同時態なり。

精神態とは個人の念慮に非ず不識的非物質の精神。また凝然真如に非ず、一切活動の本體にして永恒自存の絶對的なり。

空間時間の形式及び一切を産出實現し活動せしむべき本體たり。

無限壽とは永恒自存は絶對無限にして實には無限にも有限にもあらざる同時態にして本體なり。自己致一の内容は不變にして常寂光土の安靜なる清淨世界ありて之を現象世界の衆生劫盡て大火に焚るも我此土安穩にして慧光照無量壽命無數劫とは絶對無限壽永恒態を云ふ。

無限生命とは一切活動の生命なり、十方無量の世界に於て宗教的活動は絶對無限の阿彌の神的生命なれば何の時何の處に於ても離るゝことなきが故に恩寵によりて安立すべき一切衆生の神的生命として活動すべき絶對的生命を無限生命と名く。

十方一切衆生の神的生命は絶対の生命と分離したるものに非ず、壽と命とは精神本體と勢力また形式と活動なり。無限光壽の本體の中に在て衆生は自から迷て天然世界のみを實と計す。深く觀念的に世界の真相を觀見すること能はず、若し天然を超越して觀念的に觀する時は吾此土安穩にして天人常に充滿す。此世界を斷盡して而して後に彼岸に無限の光明世界を求むる如きは眞理に非ざるなり。そは圓具の眞理に非ざるなり。そは圓具の眞理を體達すること能はざる人の爲に別教的に直に圓具の淨土を説かざるは暫く權門の假設のみ。無限の永恒壽としては絶対依屬すべき依止する處にして無限の生命としては一切處に於て神的活動の生命と爲る。本體と活動態とは一切處に周徧せる眞心態の故に法界身と名づく。一切の處一切の時に於て阿彌の中に存在す。また其生命の存在せざる處なき故に阿彌に離るゝ處なし。故に經に如來是法界身入一切衆生心想中と。然れども法界とは物質存在に非ざるが故に天則規律の物的に阿彌を發見せんと欲する如き誤を捨ざるべからず。故に阿彌を觀せんとせば其本質に適したる三昧觀念的に佛知見開示して初めて觀見することを得べし。

無 量 光

光明とは知と慧を表明す。無限光とは絶対の一切知力にして絶対的眞心の一切知力態は一切を統一し擔保する勢能にして、知としては天則秩序の理性態なり。慧としては歸趣の理性衆生を開展する慧なり。一切知と力とによりて世界的衆生を包括して遺す處なき力なり。此一切知態が天則世界秩序として一切衆生及萬法を統一し規持する秩序として一切の萬法の無量なるは此統一的秩序によつて軌持せられざるものなく、天則秩序は盲目的因果律の流行に非ずして精神的一切知と能力との勢力によりて統一し規持すべき理性あるが故に、天則秩序は阿彌の法身の知と能との規律なり。此の統一秩序より出たる衆生は是等に理性的規律によつて動くべき理性を附せり、之を佛性と名づく。一切衆生悉有佛性とは是なり。また天則秩序とは世間に準したる語を用ゆ是

れ法身なり。法身とは絶対の精神的規則天則秩序として一切を統一し擔保する處の理性なり。

此理性に一切知と力とありて天則秩序の衆生の理性となりて歸趣の光によりて開展すべき豫地を準備せり。

絶対無限の一切知と力とは天則秩序の眞理とせば一切は之に統一し擔保せられざる衆生なきを識る時は孰か之に歸命信順するの理なるを悟らざらん。殊に此理性に順て動くべき理性付せらるゝに於てをや。衆生は天然規律の内に阿彌の知能によつて産出せられ統攝せられたる理性あるが故に、衆生は天然の生活にも不識に道德的行爲世俗的道情感情的道法の如きは此規律より出たる理性に外ならず。

阿彌は一切衆生に高等に開展すべき理性を付したる上は之を終局に歸趣すべき力を與へざるべからず。

無限光明とは歸趣の光り即ち一切慧態なり。

阿彌は世界一切を統攝擔保するのみに非ず、一切佛性を開展して終局目的に歸趣すべき性能あり。是を一切慧また表語に無限光明と云。此一切慧態は絶対的理性にして一切處に存在し一切衆生の佛性を開展し自己に致一す。此歸趣の理性に攝取せらるゝものは理性は天則秩序の理性よりは高等なり。衆生は元來開發すべき理性有す。阿彌の本願と云は絶対理性に一切を開展すべき性能を有す、大原談義佗力の實體と妙用の中に論せる如き本願の形而上論と云ふべし。

阿彌の本願力と云は理論に説明せば阿彌の本質理性に一切を開展して自己絶対に攝取すべき理性と勢力を宗教的人格の表語に表したるに外ならず。撰擇本願といふは終局目的に開展せられたる衆生心は天則秩序の理性のみに非ずして高等に開展せらて歸趣の理性に攝取せられたるものは已に天則の中より選擇せられたるなり。

歸趣の理性とは阿彌の一切慧なり、阿彌に對する觀念は智力には佛知見の啓示とし心情には解脱融合意志には靈化菩提心として神的生命に入りて活動するは阿彌の歸趣の

理性の中の生活にして自己を離脱したる精神態なり。

三三

光明と壽命

光明と壽命とは本より精神態にして天然機械的世界觀のとは簡ばざるべからず。さればとして天則的世界秩序も此絶對の法身を離れては一切有ることなしと識るべし。宗教解脱靈化の必要に出たる客體の觀念には、絶對精神は世界一切の依屬すべき本質性能なるが故に光明とは精神的光明、一切智と一切慧となり。智としては天則秩序の理性とし、慧は歸趣の光即ち一切を開展する理性と爲す。壽とは本體の永恆自存にして命とは永恆不斷に一切世界の活動態の生命と爲す。

光明を離れたる壽命有ことなく光明は壽命を助成し壽命は光明を發す、空間と時間と離ることなし。光と壽とは時間空間の形式の實體にして明と命とは空間時間内に存在活動する本體勢力の主體たり。

(神的光明と壽命とを物質的に例せば卑近なる例なれども、太陽に光線と熱線と化學線とあり、一切慧は光線に活動の原動態は熱線に、人の精神を靈化するは化學線の如し、精神態光明に輻射の理あること疑ふべからず、物理にても地球の動植物等のすべての活動の元氣は太陽のエネルギー即ち勢力に歸する如し。宗教精神的一切衆生等の神的活動の一大元動力は無限の威神力に歸せざる可からず、神的光明の勢力は神的生命として活動の元動態なり)

光明と壽命とは即ち一切能と一切慧なる精神なり。絶對精神の智と能との屬性ありて世界一切の原始根底としまた一切を統一擔保の理性とし、終局に歸趣の理性は此絶對理性の三面

(以下斷絶)

三三

大正十四年六月二十日印刷
同 六月廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區若荷谷町九八
印刷人 小林 七太郎

東京市小石川區水道橋二ノ四四
發行所 ミオヤのひかり社

編管東京六八五一番